

幕末へと逆流する時を求め

(前編)

郡 長 昭

るらしい。

彼の最近の調査で、驚くべきことがわかった。私の祖母・たつの実兄が坂本龍馬を殺害した一員だったと言うのだ。私の祖父・郡藤堂茂昭は桑名藩士であり、たつは同藩の小林家から嫁いでいる。茂昭の末っ子が私の父であり、その末っ子の私にとって、祖父母は遠い先祖のような存在で、無論生前の二人に私は会ったことがない。「そんな話、親父やおふくろからも聞いたことなかったぜ」

「だから・・・」

NHK大河ドラマ「龍馬伝」を見終わったとき電話が鳴った。東京の姪からだ。「叔父さん、うちの先祖が龍馬を襲撃した一員だったことを知っていた?」「なんじゃそれ?」

歴女とよばれるほど歴史好きの彼女が龍馬役のハンサムな俳優に同情した妄想?

「そんなんと違う、実はね・・・」

姪は長々と話だし、私は煙草に火をつけた。

私たちの遠い親戚にKという歴史小説を書いている初老の男がいる。姪は以前から電話や手紙で彼と交流があ

姪は早口でしゃべりつづける。龍馬と中岡慎太郎を殺害したのはだれか? 最近まで謎であった。しかし戊辰戦争終了後捕虜となった今井信郎の証言により京都見回り組がやったことがほぼ確実とされた。ただ唯一の証拠品であり襲撃現場に置き忘れられた刀の鞘の持ち主と噂されていた見回り組の渡辺篤が、臨終の時「刀の鞘を忘れて帰りは世良敏郎とらうという人物にて」と書き残した。しかし見回り組隊士名簿には世良吉五郎という名はあるが敏郎の名はなく、渡辺の書いたものに信憑性が疑われていた。それがKの粘り強い調査により小林たつの実兄・小林甚七重幸が、見回り組の隊士・世良吉五郎の養子と

なり世良敏郎と名のつたことを突き止めたのだ。

「わかった？叔父さんの祖母・たつさんの2つ上の兄が世良敏郎であり、私たちの先祖が龍馬を襲撃したことになるのよ。」

私は啞然として声も出ない。

「渡辺家履歴書の一部コピーを送ったから読んでみて」

「ああ・」

「でも世良敏郎という人・その後どうなったのか・どんな人生を送ったのかさっぱりわからないの。叔父さん暇でしょう。調べてくれない？」

「ああ・」

私はあいまいにうなずきながら、頭の中はまだ漠然としていた。「まいったな」とふとため息が漏れる。いま大人気の坂本龍馬を殺害した集団の中に私の先祖がいたなんてあまり人聞きのいいものではない。

2日後姪からの手紙が届いた。「渡辺家履歴書」というコピーされた用紙がぶあつく入っている。私は興味と不安を覚えながら読みだした。

「慶応3年11月15日 坂本龍馬・中岡慎太郎なるものひ

そかに徳川將軍をくつがえさんと謀り、その連累四方に多くあるゆえに・見回り組頭取・佐々木只三郎の命により自分をはじめ組の者今井信郎ほか三名申し合わせ、黄昏時より龍馬の旅宿へ踏み込み、正面に座りし龍馬を切り付け横に倒れしところをつ込み、左右に兩名おりし者同時に朽ち果たし・そのうち一名が中岡慎太郎のよし後日聞き込む。従僕もあいたおし即死す」

と襲撃の様子を生々しく書いてある。そして襲撃の後次の文章が目飛び込んできた。

「刀の鞘を忘れ残し返ししは世良敏郎という人物にて書物は少し読みそうらえど武芸はあまりなき者ゆえ、鞘を残し返るといふ都合ができ帰途・平素剣術を学ぶこと薄きゆえに呼吸あいきれ、歩みもできがたき始末によつて。拙子（渡辺）世良の腕を肩にかけ、鞘のなき刀を拙者の袴の中に縦に入れ保護し連れ帰り候。河原町の四条へ出て千本通りまで、千本を下立売りそこから知恵光院へそして西側の寺院までようやく帰り候。四条通りは宵の口ゆえにおおいに賑わい候間、世良なる者を肩にかけながら「よいやないか、よいやないか」と高い声を上げて通行候ゆえ抜き身を持ちおり候こと人に分らず、都合

よきことなり」

遺言として書かれたこの文章は、あまりにも生々しく現場を知った実行者でなければとうてい書けないであろう。そしてこの場における世良敏郎は、常に渡辺の傍におり、渡辺に切られて倒れている中岡慎太郎の背中をなおも切り付けている。「もうよい、もうよい」という渡辺の言葉は世良に向けられたそれであらう。

世良敏郎という人物像が、一つの影として出現し、時代の壁を越え、ゆつくりと自分にむかつてくるように思える。それも立派な武士としての存在ではない。むしろ目をそらしたいほどだ。しかしその意識こそ時代を超え、生々しく身近な人物像としてちかづいてくるのだ。

なぜ武に弱い世良が、龍馬襲撃の一員として加わったのか？彼はその後どのような人生を送ったのか？道々巡りする思いが止めどもなくふくらんでくる。

私は思い切つて名張に住む遠い親戚・N氏を訪ねることにした。私が小さいころ、伊勢の高校教師をしていたN氏は、よく家に来てくるとキヤッチボールなどをして遊んでくれた。8代になった彼は悠悠自適の生活を送りながら趣味で先祖の事を調べている。N氏は驚くほど老け込み、体調も思わしくない様子だ。

小さな庭がある古い家は森閑としている。「妻は息子の病院にいつているんだ」とお茶を出してくれる。「息子さん、どうされたんですか？」

N氏は耳が遠いのか答えず黙って私の前に座った。電話でも話していたが彼の先祖に当たる世良敏郎のことを尋ねると、一瞬不快な表情が走った。それでも気を取り直すと、私の机の前に書類を置いた。

慶応3年5月幕府に提出した養子縁組の届け状に小林タツの兄・重幸が京都見回り組隊士・世良吉五郎の養子となり世良敏郎と改名とある。その後桑名藩の分限帳にも重幸が小林家の家督を末っ子の恵助に譲り世良家の養子になったことが書かれてあった。

私は頭の中を整理する間もなく口を開いた。

「慶応3年5月というと半年後に龍馬の襲撃事件がおこっていますね。あなたはこの世良敏郎がその一員であったことを以前から知っていたんですか？」

口を開こうとしない彼に、私はさらに言葉をつないだ。「僕これを知ったのは最近なんです。先祖のことをよく話してくれた親父にも聞いたことがありません。どうしてなんでしよう？」

N氏は重い口を開く。

「彼の事に触れるのは我々のタブーだった」

「どうしてですか？」

N氏は無言で紙袋中から一枚の用紙を取り出し私の前に広げる。明治7年の東京高等裁判所の名簿とあり、判事名の欄にマークペンで記された世良重徳という字があった。

「重徳は敏郎の変名だ」

「じゃ・」

「明治になり、彼は判事になっていた」

「すごいじゃないですか、新しい時代に見事に適応したんですね」

N氏は同じくマークペンで記された名前を指さす。

「そこに載っている桑名藩士・立見鯉三郎は、戊辰戦争では無論、日清、日露戦争でも大活躍し、陸軍大將になっている」

ページの後半に「ノ瀬直久」という名にもマークペンが「このノ瀬という人は・？」

N氏は煙草に火をつけ、煙を吐く。

「世良と同僚で仲が良かったらしい」

なぜ「ノ瀬」の名にマークを・？私のその疑問をN氏の表情は拒否している。別の質問に変えるしかない。

「世良敏郎はその後、どんな人生を送ったのですか？家族もいたんでしょう？」

「・」

N氏の表情に明らかに戸惑いと不快感が現われ、その後の会話はかみ合わない苦さとなった。N氏は煙草をもみ消すと

「君には悪いが、今日は体調が良くないんだ」と退席を促し、立ちあがった。私は湧き上がる疑問を封じ込めるしかなかった。

名張のN氏宅を辞してから数日、私の心は揺れ動いた。彼はなぜ世良敏郎という人物に拒否反応を表わしたのか？彼は何かを隠している、其れを解くヒントが、彼の発した少ない言葉の中にあるのではないのか？

「武士にあるまじき行い」その言葉に含まれていた名前が気になる。

「立見鑑三郎」「ノ瀬直久」「小林権六郎」そして「郡長正」という名だ。

郡長正という人物は、私の遠い親戚にあたり私の長昭という名と一字違いで以前から親父が長正を意識してつけたと何度か聞かされていた。明治初年16歳で切腹した著名な会津武士とのこと。その彼が親戚にあたること

が親父にとって自慢であったのかもしれない。しかし幼い私にとっては、長正が切腹し、それが有名になったのが理解できず、脅えのような気持があった。

7・8年前一人で九州旅行をしたとき、ふと長正のことが蘇り、福岡にある彼の墓を参ろうと思いついた。

小倉駅から日豊本線で行橋へ、そこからバスに乗り大きな池の傍人家もまばらな場所では降りた。車は行きかうが人影はなく・茫然と佇むばかりだ。ままよと歩いていると小高い山の登り口に「八景山」と書かれた看板がある。以前パソソンの検索で・そのような名があったようだ。この低い山全体が古墳群らしい。息を切らして登っていると、自転車に乗った初老の男に出会った。声をかけ尋ねると・彼は自転車から降り、それを引きながら案内してくれた。山の裾に墓石が広がっている一角がある。その入り口に「秋月藩士の墓。郡長正の墓」と並列に書かれた看板があった。

「会津の人がときどきくるんですよ・」と言い残すと彼は去っていった。

私は動悸を覚えながらも看板の矢印が指す方向に歩いていった。看板の矢印が左右に分かれ、右が秋月の乱で

戦死した兵士の墓のようだ。左に曲がると墓石群の一角に郡長正の墓石があった・私はその前に立ち「やっと来ました」とつぶやき、頭を下げた。

墓石の横に大きな看板が建ち・こう書かれていた。

「郡長正は会津藩の家老・萱野権兵衛長修の次男として生まれた。明治元年の合津戦争の敗北により権兵衛は責任をとって自刃・そのため萱野家は断絶し、遺族は母の実家の『郡』の名字を名のることとなった。」

同じ佐幕派として官軍と戦った小笠原藩は・本州の北の果、斗南藩に移された会津の惨状に同情し、郡長正ほか6名を藩校・育徳館（現県立豊津高校）に留学生として受け入れた。その7人の中でも長正は文武において特に優れていた。明治4年5月1日 長正は育徳館寮南の一室で切腹し16歳の短い生涯を閉じた。あるとき彼が故郷の母にあてた手紙の中で、寮の食事のまずさ（すなわち、土地柄の文化の違い）を書き添え、それがたまたまほかの地元の生徒たちの目に触れ「武士にあるまじきこと」と非難を受けた。長正はここで弁明することなくその日切腹した。

平成25年5月1日 郡長正公没後百四十年を記念し会津若松市友好訪問歓迎レセプションが開催され会津若松

市とみやこ町（豊津町）との交流を深めた。

読み終えた私は目を閉じた。長正のことを考えるたび、二つの疑問が再び強く私を捉える。なぜ彼は些細なことで腹を切らねばならなかったのか？。そして会津の人もこの地の人も、彼の行為を称えるように顕彰しているのはなぜか？。少年が刀を腹に差し込み切りさく、修羅場のイメージにたじろぐばかりだ。長正の墓は、なにも答えてくれない・私は墓石に一礼し、長正が学んだという育徳館に足を向けた。

山を下りると広々とした田園風景の中にはいった・畑の中を一直線の道が延々と前方に延び、それが尽きる小高い所に学校らしい建物が見えた。育徳館に違いない。私は確信しそれに向かって歩いていった。

かつての育徳館であった現在の豊津高校に来ると・中・高一貫性の近代的な校舎が広い敷地内にいくつも建っている・校庭を横切り校舎の玄関に入った。

「こおりながあきさま？」私の差し出した名刺を、事務長が驚いたように声を出して読む。

「郡長正の遠い親戚筋にあたります」と言い、伊勢から来たことを告げると「それは、それは・」と口ごもった後、校内を案内してくれた。

江戸時代から建っているという黒塗りの門をくぐると「郡長正公ゆかりの石」と書かれた看板が目に入る・庭木に囲まれた一角に大きな石が置かれ、其のそばの看板に由来が書かれていた。旧会津藩の有志により寄進された鶴ヶ城の城石と萱野家の墓石の一部とあった。私は会津の人たちの、長正への思いの深さに心を打たれた。

「あのあたりに育徳館の寄宿舎がありました」

校庭に立った事務長が、校舎の後方にポツリとたつ巨木を指さす。

「そこで長正さんは・同郷の学生の介錯で切腹したと聞いています」

この地に住む彼にとつて・たとえ百五十年前のことであっても、迎え入れた留学生を自害させてしまった負い目を、彼は未だに感じているのかもしれない。

私は事務長に一礼すると豊津高校を後にバス停に向かった。

あれから8年たったが、長正に抱いた疑問はまだまだ解かれていない・郡長正に次いで頭に浮かんだのは判事名簿にマークペンで記されていた立見鑑三郎の名だ。彼は桑名藩士で、戊辰戦争で活躍しただけでなく、明治になると日清・日露戦争でも大活躍し陸軍大将になるなど桑

名の人々にとって英雄でもあった。それが世良敏郎とどのような関係があるのだろうか？。

立見鑑三郎は弘化2年江戸詰桑名藩士の子として生れた。少年となった彼は藩主・松平定敬の小姓となり剣術・槍術の使い手として知られるとともに湯島の昌平坂学問所に学び文武両道に優れていた。彼の才能が発揮されたのは・戊辰戦争からである。25歳のときおこった北越戦争で彼は兄の町田老之丞、弟の鎌次郎、郡茂昭、小林権六郎らと闘った。

戊辰戦争終了後、立見はしばらく謹慎していたがその間に猛勉強し明治になると司法省の判事となった。しかし士族の反乱が相次いでおこると明治政府軍に入り西南戦争のとき陸軍少将となった。

